下北山村・ならコープが包括連携協定締結へ

過疎・高齢化…村の課題共に取り組む

村民と共に村づくり　中野

中野　素子（なかの・もとこ）　2005年ならコープ理事、2011年同副理事長、2017年より現職。奈良県生活協同組合連合会理事、（公財）奈良県緑化推進協会理事などを兼任。

互いを生かす連携を　南

南　正文（みなみ・まさふみ）　立命館大学経済学部卒。2005年４月下北山村総務課長就任。2009年４月同村副村長就任。2015年４月より現職。

下北山村と市民生活協同組合ならコープ（以下、ならコープ）が10月3日、村づくりのための包括連携協定を結ぶ。ならコープは、これまでにも2015年6月に川上村と、2016年4月に奈良県、11月に吉野町と南都銀行による包括連携協定を結んでいる。今回の協定は、下北山村とならコープが協議しながら、村の発展と活性化を目指すとしている。連携協定後の村づくりも視野に入れ、同村の南正文村長とならコープの中野素子理事長の対談を行った。

（司会は池森康二・奈良日日新聞社企画部長）

―今回の協定の意義をどのように捉えていますか。

南　過疎と高齢化が加速しており、高齢者を支える人材も不足しています。活力を取り戻すためには、近隣の市町村や、外部の人材、民間企業などとの連携が不可欠となっています。

今回の協定は、村営の小又川発電所の設備更新をお手伝いいただくことが直接的なきっかけですが、誰もが安心して暮らし続けられる村づくりに共に取り組みたい。

中野　ならコープは、「ならの元気は吉野から」を合言葉に、吉野共生プロジェクトを進めています。北部の人口集中地域の奈良盆地と、南部・東部の山中（さんちゅう）との人・モノ・サービスの交流を深め、山中のくらしと経済を元気にすることで、また、多くの組合員による「たすけあい・ささえあい・わかちあい」の共同社会づくりを目指す取り組みです。

今回の協定には3年の準備期間を要しましたが、村長をはじめ、職員の方にも私たちの理念・活動に対し、大変温かいご理解をいただきました。

今後とも下北山村と協議しながら、ご事情にあったお手伝いをしていきたいです。地域と一緒にすすめていくことが重要であり、スタートラインに立ってワクワクする気持ちです。

―具体的にどのような連携を進めますか。

南　まず、ならコープグループの電力発電事業から得られる売電収益の一部を、村の事業にどのように役立てられるのか。それ以外にも、村内集落を30分以内で回れる利点を生かす手立ても考えたいと思います。

中野　小又川発電所の増強事業は、豊かな水資源を生かしたエネルギーの地産地消の取り組みでもあります。昨今の大規模災害の頻発を考えても、この事業は大きな意味を持ちます。

ならコープでは、日本生協連の取り組みの一環で、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）行動宣言を今年度の通常総代会に提案し確認されました。

小又川発電所の増強もその一環であり、発電した電気は「ならコープでんき」の電源として、組合員に供給します。組合員の使用する電気の地産地消を実現し、山間部と平野部の地域間交流を実現できればと考えています。

―それ以外の連携はどのようなことが考えられますか。

南　村内には、「ＮＰＯ法人サポートきなり」があり、高齢者を支えるさまざまな活動を行っていただいています。例えば、草刈りや障子の張り替えといった生活支援、または村民の足を支える有償交通などです。

こうしたＮＰＯとの連携をしていただきながら、ならコープの配達網を絡ませていけば、よりきめの細かい住民サービスが実現できるのではと期待しています。

中野　川上村との連携では、村で設立された一般社団法人「かわかみらいふ」に、ならコープの村内への配達をお願いしています。ならコープは、県内拠点から村まで商品を持っていきます。配達を行う支所から遠隔地への配達は、天候などの影響が大きくなります。地元のサポート機関との連携はありがたいです。

また、下北山村の物産や豊かな自然を広報媒体などを通してご紹介することができれば、村への観光や地域の振興に貢献することができるでしょう。

今回の協定を通じて組合員にも村のことを知っていただき、下北山村のファンが増えることを願っています。

南　村では「関係人口」の増加にポイントを置いています。これは、村のことを知ってもらい、または考えていただくことを契機に、村を訪れ、できれば移住をしていただくことを目的にしています。

具体的には、雑誌の企画と連動し、首都圏の方々を対象にした「奈良・下北山　むらコトアカデミー」を開講しています。今年で3年目を迎え、毎年10人程度の参加があります。インターンシップもあり、村民との交流もある。その中で、村への提案もいただいています。

中野　ならコープでも、「かかわり」を大切にしています。日常的には買い物を通した地域貢献のしくみ、エシカルな商品など、地域や社会が良くなる消費行動を促進しています。

大切なのは、自分の意識や行動の中で、地域社会に向けた関わりをどう持つかということ。小又川発電所の電気が「ならコープでんき」の電源となれば、その利用が下北山村との関わりにつながります。村を知り、考えるきっかけにもなればと願っています。

―今後の抱負をお願いします。

南　連携を実のあるものにするためには、どちらも一歩踏み出さないといけない。ならコープにはお世話になることが多いと思うが、互いの利点をより生かし合うこと、また弱点を補完し合える関係づくりに努めたいと思います。

中野　吉野共生プロジェクトで掲げる「ならの元気は吉野から」。地域の魅力を生かし、掘り起こし、都市部との交流につなげる取り組みは、協同組合の使命ではないかと思います。

1年前に発電を開始された東吉野村の「つくばね発電所」は、住民の力で復活されました。全国からの見学者への対応も生き生きとなさっており、住民主体の地域づくりとしての関心も集まっているようです。

下北山村でのお手伝いも、村民の方と一緒になって村づくりを考えたい。今回の協定がそのきっかけになることを願っています。

―ありがとうございました。

連携協定後も互いにつながりを求めていくことを確認した中野理事長（右）と南村長＝下北山村役場で

南下北山村長と中野ならコープ理事長が対談

「ＮＰＯ法人サポートきなり」が実施した地域住民との南朝みそづくり体験

県内で一番早く咲くと言われる村内のスポーツ公園の桜

ならコープが増強を行う村営の小又川発電所

村民や観光客に人気の「きなりの湯」

ならコープが掲げる吉野共生プロジェクトイメージ